

一般演題 VII 内 分 泌 (53~65)

53. RES-O-MAT T₃Kit の使用経験

千葉大学 放射線科

○清川 恒 館野 之男 有水 昇

〔目的〕 われわれは T₃ 試験用キット RES-O.MAT T₃kit (第1ラジオアイソトープ) を入手し、これについて 2, 3 の実験および臨床試験を行なったので報告する。

〔方法〕 ① 各キット間の値の変動, ② テクニックによる変動, ③ 保存凍結血清における変動。を同一人血清 (甲状腺機能亢進症 1 例, 甲状腺機能低下症 1 例, 正常甲状腺 2 例) について検査した。また従来当教室で臨床に利用されている T₃ レジン 摂取率検査法 (R. S. U. ダイナボット) との比較を行なった。

〔結果〕 この検査法の測定精度は良い結果を示した。血清の量も少なくて済む。手数は大体同じである。臨床例については R.S.U. と良い相関を示した。

54. Res-O-Mat T-3 Kit の試用経験

金沢大学 核医学診療科

○三嶋 勉 森 厚文 久田 欣一

甲状腺機能検査法として、最近発表された Mallinckrodt 社の Res-O-mat T-3 kit 法は、RSU 法とは逆に未結合 ¹³¹I-T₃ を特製の固形化されたイオン交換樹脂 (レジストリップ) に吸着させて除去し、患者血清の ¹³¹I-T₃ 摂取率を直接に求める。この値をコントロール血清の摂取率との比 (T-3 binding capacity index: TBC Index) であらわすものである。TBC index は、機能亢進症で低く、低下症では高く、正常は中間値を示すことになる。この方法は、RSU 法にくらべて手技が非常に簡略であり、測定値の技術的誤差がほとんどない。温度補正が不要であり、2時間の incubation であれば、あまり時間の正確を要しないなどが特徴である。今回、われわれは、Res-O-mat T-3 kit を甲状腺機能検査法として臨床的に使用してえたデータを RSU 法と比較検討するとともに、日常検査法としての意味づけを発表する。

55. Res-O-mat T₃ Kit 試用経験、ならびに本法と Tetratorb 法, Triosorb 法との相関について

慈恵医科大学 放射線科 高橋貞一郎
中央検査部 ○今関 恵子 岩崎 恭子
陳 増子

目的および方法: 直接 thyroxin を測定する Tetratorb 法は甲状腺機能診断上優れた方法であることは論をまたない。しかし Triosorb 法, TBI 法も簡便で比較的高い情報が与えられるので捨て難い方法である。著者らは TBI 法に比し更に操作が簡便な Res-O-mat T₃ kit を用い基礎的検討を行なった。あわせて本検査法と Tetratorb 法, Triosorb 法の相関を求めた。

結果: 本法は温度補正, 時間補正を必要とせず、比較的正确な値を示し、各方法との相関も高く、一般検査室において、充分使用しえる方法であると考えられた。

56. RES-O-MAT T-3 Kit による甲状腺機能検査法について

国立東京第二病院 ○与那原良夫 高原 淑子
桐村 浩 倉光 一郎

RES-O-MAT T-3 kit による T-3 test は、イオン交換樹脂 (resin strip) を用いて未結合の ¹³¹I T-3 を除き、患者血清と標準血清でそれぞれ摂取率を求め、さらに両摂取率の比から T-3 index を求め、これにより甲状腺機能を診断する方法である。

本法は 1) 固体化した resin strip のため洗滌操作を省きうる。2) 血清 0.5ml あればよい。3) incubation は室温で行なえ、2時間も時間を大きく越えなければ特に正確である必要はない。4) ピペット操作は1回のみでよい。などの利点を有するとされている。

われわれは、今回第一ラジオアイソトープ研究所より本 kit の提供を受け、測定法および測定値に関して二、三の検討を試みたので報告する。

57. Tetratorb Kit による血中甲状腺ホルモンの定量

都立大久保病院 放射線科
木下 文雄 前川 全